

平成30年度 【 学園研究費助成金< A > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ イホベヒロシ
氏名 五百部裕

研究期間 平成30年度

研究課題名 ウガンダ、カリンズ森林におけるオナガザル科霊長類の採食戦略の解明

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	五百部 裕	人間関係学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

代表者は、2009～2016年度の間、2期8年にわたりアフリカ産オナガザル科霊長類の採食戦略の解明を目指した科研費を受領し、ウガンダとタンザニアで現地調査を行った。そして2017・2018年度も引き続き関連するテーマで科研費を申請したが不採択となった。そこで2017年度は分担者として参加している科研費によってウガンダに出張し継続資料を収集した。しかし2018年度はこの科研費も終了し現地調査を行う資金がなかった。一方でこのような研究は、資料を継続的に収集することが必須である。そこで本研究では、夏にウガンダで現地調査を行い新たな資料を収集するとともに、これまで収集してきた資料を分析し、アフリカ産オナガザル科霊長類の採食戦略を解明することを目的とした。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

2018年8月10日から27日まで、ウガンダ、カリンズ森林に出張し、ロエストモンキー、レッドテイルモンキー、ブルーモンキーの直接観察を行った。現地調査では、人づけされているこれら3種のサルを個体追跡、ないしは群れ追跡を行い、採食行動(採食場所や採食食物、採食した高さなど)や社会行動、遊動などに関する資料を収集した。またこの調査の際に、継続した資料の収集を依頼している現地アシスタントの記録を回収するとともに、さらに継続して資料を収集するように依頼した。この現地調査の期間以外は、これまでに収集した資料や今回回収した資料の解析を行った。

3. 研究成果の概要 (600 字～800 字程度で記述)

2009 年度からウガンダ共和国カリンズ森林に生息するオナガザル科霊長類 4 種 (ロエストモンキー、レッドテイルモンキー、ブルーモンキー、アビシニアコロブス) の継続的な調査を行ってきた。この調査では、調査対象種の行動観察によって彼らの採食行動などに関する生態学的資料を収集するとともに、硬度計を利用して彼らの採食食物の硬さを計測した。加えて、ヨーロッパの博物館等に保存されている頭蓋骨等の資料を計測した。さらに糞などから彼らの遺伝子試料を採取した。そしてこれらの資料を総合的に検討し、アフリカ産オナガザル科霊長類の採食戦略について以下のような点を明らかにした (Ihobe et al 2010; Koyabu et al 2010; 清水ら 2016; 河本ら 2016 など)。1) レッドテイルモンキーとブルーモンキーは同じような硬さの若葉を利用していたのに対してロエストモンキーはより堅い若葉を利用しており、アビシニアコロブスはこのグエノン類 3 種よりさらに堅い成熟葉をよく利用していた、2) グエノン類 3 種は同じような硬さの果実を利用しているのに対し、コロブスはより柔らかい果実を利用していた、3) 頭蓋や歯の形態の種間の類似性は、利用している食物の硬さの類似性とよく対応していた、4) 苦味受容体レベルではサリシンに対する感受性にグエノン類 3 種間で違いが認められた、5) 次世代シーケンサーを用いてグエノン類 3 種それぞれの全遺伝子配列を決定し、この 3 種の苦味受容体遺伝子のレパートリーを明らかにした。このように行動学的解析と形態学的・遺伝学的解析の協働によって、オナガザル科霊長類の採食戦略の種間差を描き出すことにある程度成功した。

本研究では、上記の成果を補完する資料を収集するとともに、現地アシスタントが収集した資料を回収してきた。このような形で今年度収集した資料については、現在解析中であり、結果が得られ次第、学会発表などによって公表する予定である。

4. キーワード (本研究のキーワードを 1 以上 8 以内で記載)

①オナガザル	②ロエストモンキー	③レッドテイルモンキー	④ブルーモンキー
⑤ウガンダ	⑥カリンズ	⑦採食戦略	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

上記のように、今年度収集した資料については現在解析中である。そのため、今年度新たに研究成果を公表することはできなかった。そこで今後は、今年度得られた資料を前年度までに収集した資料と合わせて解析したのち、その成果を来年度 (2019 年度) 以降、日本霊長類学会や日本人類学会などで発表する。また合わせてこれらの成果を、*Primates* をはじめとした英文専門誌に投稿していく予定である。